

**PRESSBOOK**

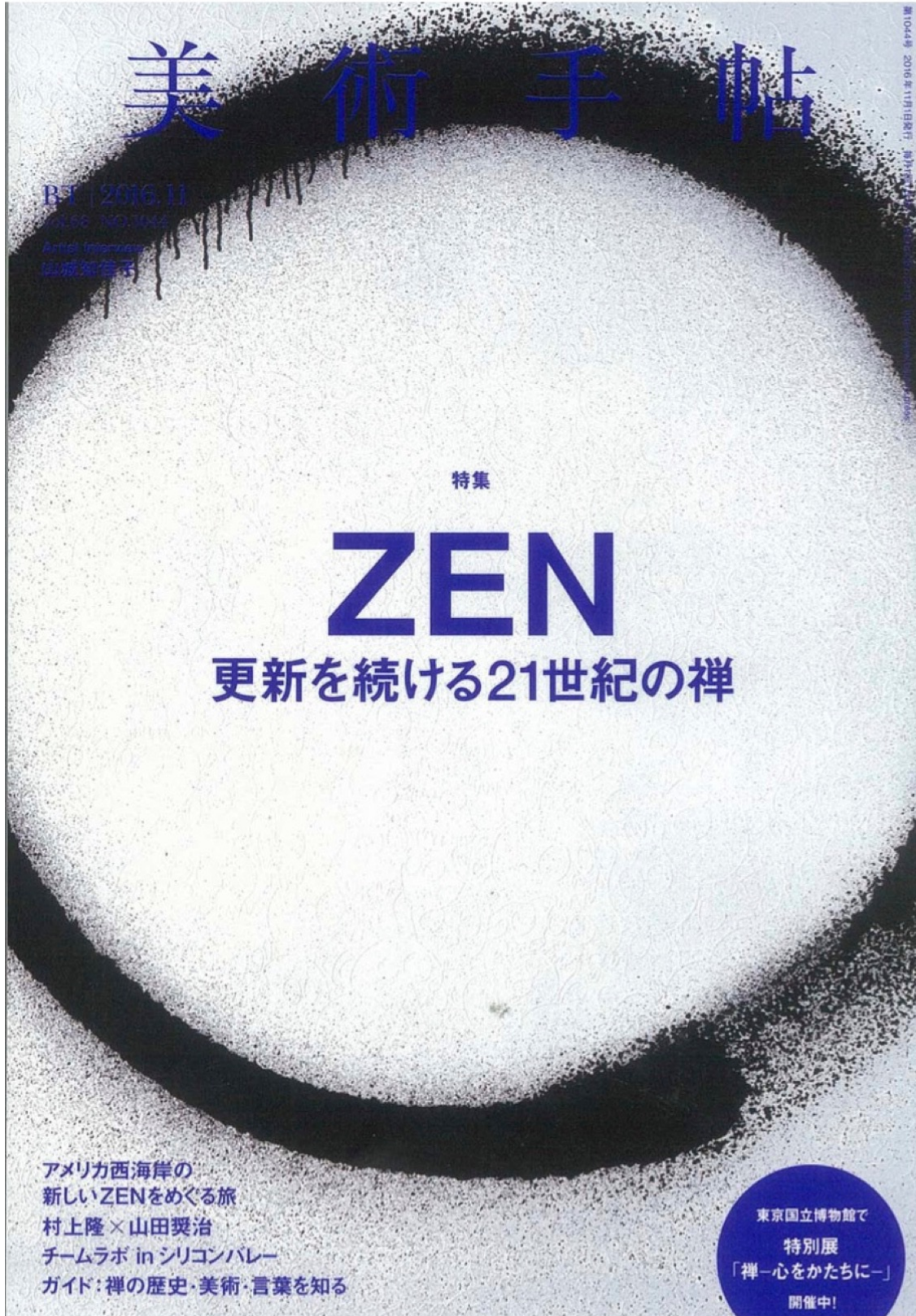
Takashi MURAKAMI

*Bijutsu Techo*

*November 2016*



Bijutsu Techo  
November 2016  
Yamada Shoji



# 美術手帖

BT | 2016.11  
1156 NO.1016  
Artist Interview  
品城 繁信子

特集

# ZEN

## 更新を続ける21世紀の禅

アメリカ西海岸の  
新しいZENをめぐる旅  
村上隆 × 山田奨治  
チームラボ in シリコンバレー  
ガイド: 禅の歴史・美術・言葉を知る

東京国立博物館で  
特別展  
「禅—心をかたち—」  
開催中!



Bijutsu Techo  
November 2016  
Yamada Shoji

京都 妙心寺住持 眞祥良  
 結城 妙心寺の増築で、1634年に徳川  
 幕府の政令、徳川幕府の藩政を経て建立  
 取材場となった妙心寺の境内には多種多  
 様な珍しい庭園、海北五右衛門の「雲龍  
 図」が描かれた石灯籠、徳川幕府の御  
 図が描かれた「好景図」(春日  
 寺、妙心寺)、徳川幕府の御図、徳川  
 幕府の御図(特別公開)、など、海北五右  
 衛門の御図(特別公開)「妙心」を「妙心」  
 寺園に「妙心」を「妙心」

2007年のヨーロッパの巡回をきっかけに、  
 有名アーティストの作品を鑑賞し、  
 東日本大震災後、「五百羅漢図」を制作した村上隆、  
 文化の源流が生んだ、日本の神楽と、海外における  
 ZENアートのスタイルを村上はどのように受け継いでいるのか。  
 京都の妙心寺、結城にて、山田奨治が聞く。

山田奨治 聞き手

SPECIAL INTERVIEW

# 村上隆に聞く、 芸術作品に自由を宿す、 修行としての ZENアート

61 取材協力 一輪清宗妙心寺派総持院、臨済宗青葉宗達会各派会議員、日本経済新聞社

大森克己—撮影 経院園樹—構成 Photo by Kazumi Omori... Edit by Tatsuki Suzuki 62



**Bijutsu Techo**  
**November 2016**  
**Yamada Shoji**

**円相、達磨、  
 五百羅漢を描く**

——村上さんは現在、バリのギャラ  
 リー・ペロタンで個展「Learning  
 the Magic of Painting(絵画の  
 魔法を学ぶ)」を開催されていま  
 す。昨年、森美術館でも展示され  
 た《五百羅漢図》と同じ羅漢を描いた  
 作品や、「円相」シリーズなどが展  
 示され、米誌『ウォール・ストリー  
 ト・ジャーナル(WSJ)』では、  
 「Zen and the Art of Takashi  
 Murakami(村上隆のZENと  
 アート)」というタイトルの展評  
 もありました。はじめにこうした  
 評価をどう受け止めていらっしや  
 いますか。

**村上** これまで「円相」や「達磨」  
 など、禅の美術に刺激を受けた作  
 品をいろいろと描いてきましたの  
 で、そう言われて違和感はありません。  
 せん。そもそも、達磨を意識的に描  
 き始めたのは、ニューヨークのガ

ゴシアン・ギャラリーで初個展を  
 行ったとき(2007年)でした。  
 それまでやってきたアニメやマン  
 ガ的な作画ではなく、当時のアメ  
 リカの世相と、日本人である僕の  
 関係性をしっかり表現しようと  
 テーマを設計しました。2007  
 年当時、アメリカはイラク戦争の  
 泥沼状態にあり、また9・11以降の  
 自信喪失の時期でもあったので、  
 日本の戦国時代のころ、つまり室  
 町から安土桃山時代の頃のような  
 禅の思想が有効ではないかと仮説  
 をたてました。日本史上で芸術が  
 もっとも花開いた時は、その戦国

時代でした。言ってみれば、アメリ  
 カは常に世界の何処かで戦争を  
 行っている戦時下の国。人間の死  
 生観と芸術が密接に絡んでいた混  
 沌とした国アメリカに、禅的な思  
 想を今一度翻訳し直すのはありだ  
 と考えたのです。なので、現代美術  
 的な文脈の達磨を描きました。武  
 者小路千家の若僧正、千宗屋さん  
 にもニューヨークまで来てもらっ  
 て、お茶を点でももらいました。カ  
 ニエ・ウエストや、ジェイ・Zもそ  
 のお点前に参加してくれました。  
 そういう翻訳してゆくプロセス  
 が、ある意味「禅」ではなくて

「ZEN」的な方向性ではあったと  
 思います。そして、そのゴシアン  
 での個展は、大反響を得ました。  
 ——展示タイトルに「Magic of  
 Painting」の言葉があることも  
 興味を引きます。

**村上** 今回のパリでの展覧会は、  
 芸術の首都はパリだ!という自負  
 のある場所での展覧会というこ  
 とで、芸術の真髄を検証すること  
 をメインテーマとしました。羅漢  
 図、円相、デジタル的な画像の抽象  
 画、ミニマル的なカラーフィール  
 ドのペインティングなどの実験と  
 ともに、イギリスの芸術家フラン



CLOSE  
 UP

**海北友雪の  
 《雲龍図》に注目!**

江戸時代初期の名作《雲龍図》。海北友雪は海北派の画家で、父は海北友松。狩野派や大和絵の影響を受けた装飾的画風の海北派を再興した人物。P74でふたりが座っている背後の襖に描かれた龍は雌、対してこちらは雄と言われている(上)。村上がインタビューで述べているように四角に描かれた龍の爪(下)



**Bijutsu Techo**  
**November 2016**  
**Yamada Shoji**



ギャラリー・ペロタン(パリ)で12月23日まで開催中の個展「Learning the Magic of Painting」展示風景 Photo by Florian Kleinfenn

シス・ペーコンの僕なりの模写も行ってみて、様々なバリエーションの作品を持ってゆきました。絵画作品の残布を使って、それらを接ぎ合わせた平面作品と飽もつくっており、絵画とプロダクトの境界線についての、ルイ・ヴィトンとのコラボレーションから引き続いての問いかけも行いました。そもそも絵画として成立しているものとしていないものの差ってどこにあるのか、ミニマルや概念芸術を経たものは、ことさらわかりづらい。それを「魔法」と定義し、絵画の魔法を学ぶのだ、というステイメントを出しました。今日も、こちらで海北友雪の《雲龍図》を見て、絵画の魔法に触れている気がしています。

——と言いますと？

村上 例えば、龍の爪の部分。爪Ⅱとがっている、という先入観があるので、そう描いているもんだ、と実際の絵を前にしても思い込んでいるのですが、実物の作品の爪部

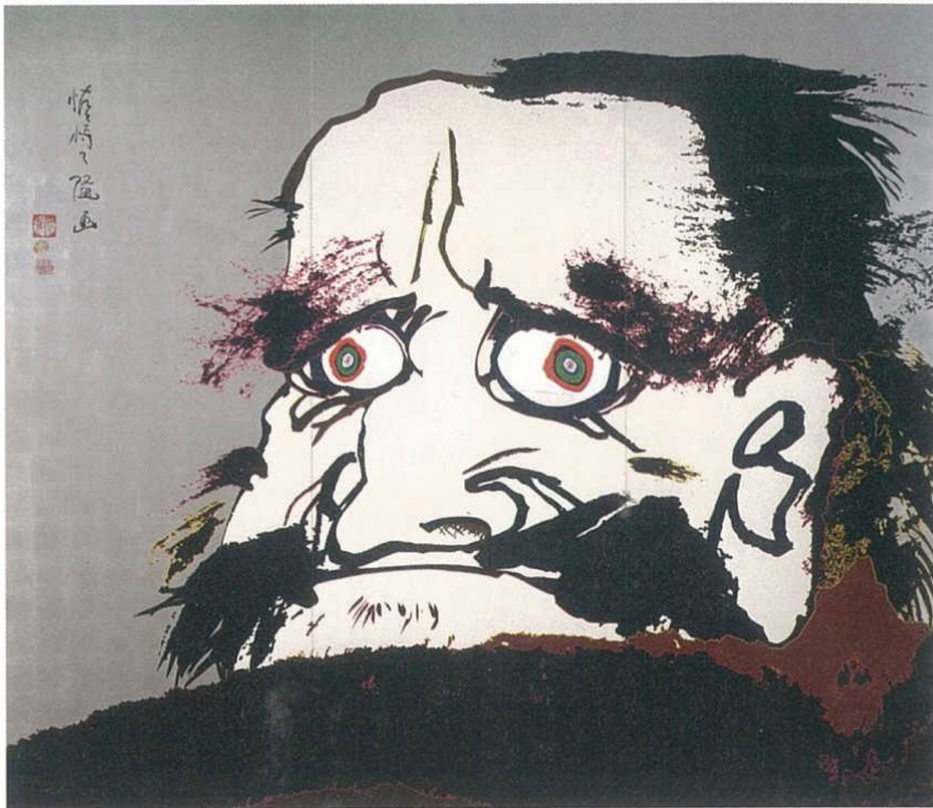
分は、ほら、とんがっていない。それどころか、四角くなっているんです。なのに、雲にその先が隠れているようにしか見えなわけ、ココに描かれてもいないものを感じてしまう「魔法」があるんですよ。

——この龍の爪に「やみ爪」[Magic of Painting]を学んだということですね。「円相」シリーズを描き始めたのは、どのようなきっかけだったのでしょうか？

村上 僕はグラフィティが好きで、と言っても、反社会的、政治的な文脈ではなく、スプレーでシュートってやってる、80年代のニューヨークの地下鉄でガッツとタグを描き殴っているのが好きでした。社内にグラフィティに詳しい人間がいたので、いろんなスプレー缶やノズルを用意してもらって、段ボール紙をたくさん用意して、いろいろシュートってやってみます。で、ひとつ、ぐるんと、円を描いてみたんです。すると、綺麗な円ができたので、それを撮影してデータにして形状を少



**Bijutsu Techo**  
**November 2016**  
**Yamada Shoji**



村上隆 目を見開けど実景は見えぬ。ただ、己、心、凝視するばかり也 2007  
 板にキャンバスをマウント、アクリル絵具、プラチナ箔 243×282×5cm(3枚組) Courtesy of Gagosian Gallery, New York

し補正し、シルクスクリーンに転化して、それからキャンバスに刷って、「円相」としました。

初期のグラフィティは、シンナー系の塗料を使ってライターはそれを吸い込んでやってトリップもしたと思うんですね。水墨画の世界でも、酒に酩酊して心を真っ白にして描くという技がありました。僕も似ている気がします。僕の円相は、水性のスプレーだったのであいに酩酊はしなかったんですが、いい加減にシュウってやるときの頭が空っぽになる感覚。そこがとてもメイクセンスでした。でき上がった円相作品を発表すると、専門家に円相は筆の入り口が7時の部分からが正調なのだが、お前さんののは5時の部分からスタートしてて邪道である、と言われました。なるほど、そういう仕組み、決まりがあったのか、と思いつつも「入口と出口がズレている。それこそ、いいんじゃないか!」みたいな気持ちになり、これで良し

としました。円相作品は、描くときの気持ちを空っぽにする実践だったのですが、もう一方、最近実践していることがあります。頭を空っぽにする方法として、制作する作品点数を意識的に増やしています。1日1枚の絵画作品の完成を目指して、一つひとつの作品におけるこだわりを捨てようとしています。

——すると、もちろん戦略はあります。自然に禅的なものに近づいていったと?

村上 僕自身は、固有の思想としての禅やらZENに近づこうとしている訳ではなく、無を呼び込んで芸術作品に自由を宿したい一心なんです。

### コレクションして

### その価値を飲み込む

——村上さんはご自身でも禅美術のコレクションをされていますね。

村上 白隠の達磨と書、仙厓和尚



●● 固有の思想としての  
禅に接近するのではなく、  
無を呼び込んで  
芸術作品に自由を宿したい  
一心なんです ●●



《雲龍図》の前に、村上が  
「絵画の魔法」を感じる表  
現と挙げた「波頭」の前で

の軸物、一休和尚さんの書などを  
数点持っています。仙厓のモノは、  
辻(惟雄)先生に見ていただいたら、「ぜんぶ贋作だよ」と笑われて  
しまつて(笑)。でも「仙厓は他人に  
絵を描かせてサインだけしたりも  
したので、そのほとんどが贋作と  
も言えるし、真作の定義とは何か  
も危うかつたりもするから、さあ、  
どう考えるかな! わははははは」と  
笑つて去つてゆき、まさに禅問答  
的な査定をしてくれた、そういう  
モノを持っています。

——コレクションから具体的に作  
品に反映することもありますか?

村上 コレクションは今のところ、99.9%が購入して手に入れた  
ものです。つまり、画商さんがい  
て、購入資金を工面して、苦心惨愴  
して手に入れるわけです。びゅ  
っつて、一気呵成に数秒で描いた  
ようなものが結構な価格で、な  
ぜ?と思いつつも、その理屈を考  
えつつ、購入するしないを考える  
わけですが、そのときに、その作品

の価値を飲み込むのです。もし贋  
作なのに大枚叩いたとしても、そ  
れは購入する自分の等身大な姿で  
あつて、偽りはない。勉強不足なわ  
けです。でも、何かその贋作に感じ  
るものもあつたわけで、自分の愚  
かさをも飲み込むという、その意  
味で深い学習ができます。本物の  
作品は前に立つと、作家の存命中、  
作画していたときの息遣いやら考  
え方が、小さな軸物や、屏風でも伝  
わってきます。もしこの《雲龍図》  
の襖絵が手に入つたら、それはも  
う物凄い学習量だなあ〜とか、妄  
想してしまいます。

——村上さんは幼いころから、宗  
教に関心があつたのでしょうか?

村上 ああ、博士論文のタイトルが「意味の無  
意味の意味」ですが、とても禅的な  
香りがする、と思っていました。  
村上 あの論文を書いたときは、  
禅ということは念頭にありません  
でした。ただ、思い返せば4、5歳  
のころから、一種の虚無感、厭世的  
な思考は持っていました。それが

論文を書く28歳くらいまでに発酵  
熟成して、あのタイトルになった  
のだと思います。父親が戦争オタク  
で、戦記物の雑誌を大量に買い、  
テレビでベトナム戦争や太平洋戦  
争のドキュメンタリーがやってい  
ると、僕ら子どもがアニメを見て  
いても、チャンネルを変えてしま  
う。そういう番組がたくさんやっ  
ている時代でもありましたが、特  
にベトナム戦争のドキュメンタ  
リーは影響がありました。ナパ  
ーム弾の掃討作戦の炎のオレンジ色  
が脳裏に焼き付いています。もうひ  
とつ幼少期の体験で言えば、うち  
が仏教系の新興宗教にはいつてい  
て、集会などに参加して、信者が行  
うマスメディアのようなフィルムを  
みんなで見たり、ダンスしたり、体  
験談を語り合つたり、仏教經典の  
解説の勉強会をしたりという、子  
ども心に「おかしいよなあ」と。その  
宗教の欺瞞や、嘘っぽい教義に人  
が惹きつけられていく仕組みの不  
思議を、わけがわからんながらも、

ZEN — TAKASHI MURAKAMI —



お経をあげながら考えてました。  
—— 幼少期の家庭環境とオタク文化への関心とのつながりは？

**村上** 戦争と宗教と、敗戦後の日本は経済復興を遂げていても、もやもやし続けてきた時代だったと思います。そんななか、そのもやもやを代弁してくれたモノに『宇宙戦艦ヤマト』や『機動戦士ガンダム』などのオタク文化がありました。

—— そうした背景があつて、3・11を契機に『五百羅漢図』をつくられると。一方で、震災後には映画『めめめのくらげ』(2013年)の発表もされました。ともに、ナラティブという要素が非常に重要な作品ですが、それと震災の関係とはどのようなものなのでしょうか？

**村上** 勧善懲悪ではないオタク的な歪んだお話への強い傾倒が高校生から大学にかけてずっとあったのですが、オタクアニメの「おはなし」を盲信したわけではなかった。それは幼少時の新興宗教の体験を経た、物語への疑義があつたかと

思います。そこから、絶対的な物体への信心として、アート作品そのものの制作に実感が持てたんだと思います。そして東日本大震災。津波。天災による大量の死。原発爆発。国の人々みんな対応への

本気の絶望感。モノへの不信が始まります。被災地では突然肉親が亡くなったり、自分の住み暮らした土地が汚染されて立ち去らねばならなくなつた人々が、理屈だけで気持ち収まるはずもなく、そのリアリティー、事実だけの直視とは違つた、人にとつてのストーリーの重要さをジワジワ感じ始めました。震災前まで、自分の中の「おはなし」との決別があり、幼少期に抱いた宗教への嫌悪感から、絵空事すべてを拒絶していたよう

で、例えばアニメーションを見て感動したとしても、それは制作しているスタッフの技術に感動しているのだと思ひ込んでいたりしました。しかし、「おはなし」は衣食住と同じように、なければ生きてい

けないものであることを、震災を機に気づいた。例えば死んだ肉親はあの空から自分を

見ているとか、この天災や原発のあり方は運命であつたのだとか、必ずしも真実そのものではない、「おはなし」の創造。それを裏打ちしてくれる過去の体験を経た宗教の中にある寓話が、どうしても必要だとい

うことが理解できなくなりました。そのときに、はじめて「おはなし」との和解が出来た気がします。「おはなし」にリアリティーが持て、それを核に、映画を撮ることも出来ました。そして、映画を一回つくってみると、自分がこれまで拒否していた絵画作品内への「おはなし」の流入も自然と可能になり、その要素をドバッと入れ込んだ『五百羅漢図』が産まれ

## ●● 日本人も自然の圧倒的な力に 対抗するには、ときに 宗教的なものを必要とすることに 気づきはじめています ●●

ました。

—— 宗教や「何かを信じること」への認識の変化があつたということでしょうか？ WS Jの展覧にも、震災を通して「村上隆は自分の禅を見つけた」とあります。

**村上** 3・11だけではなく、日本ではずっと地震、台風、水害、様々な天災が起きており、よく目を凝らしてみると、今もなお、人の住み暮らすすぐ隣に、神社や寺が寄り添って存在していたんですよ。神頼みで天災が収まる、などと考えるわけではなく、起こつてしまった災害に対して、ヒーリングさせる術が必要であり、その処方

の場としての神社や寺のかなあつた。つまり「おはなし」フィクションは実態としても日本文化の中に生き続けてきたんだなあと思つ





Bijutsu Techo  
November 2016  
Yamada Shoji

ZEN  
TAKASHI  
MURAKAMI



村上隆 円相:シャングリラ 2015  
アルミニウムフレームにキャンバスをマウント、アクリル絵具、全箔 180×180×5.08cm

きました。

——そうした3・11後の文脈は、海外のアートシーンではどう受け止められていますか？

村上 アートシーンというより、世界の目が、3・11の震災に刮目しました。それまでは中国の変化がアジアのシーンの話題の中心だったのですが、その視線がこちらに向いた。以前は、日本を語るときの見立ては、コミックとオタクとコスプレ、あるいは戦後復興の中で築かれた、テクノロジと勤勉でSF的な未来都市というものだけだったのが、震災と原発の爆発で、マンガやアニメが繰り返し描いてきた、カタストロフも内在した。それによって、光と影のコントラストのくっきりとした国のキャラクターが再び立ち上がったと思います。

——海外の学会でも、3・11後の日本社会や文化というセッションをよく見かけます。

村上 震災以降の日本人の心に

は、自然の大きな破壊力に対する恐怖や想像力が宿りました。と同時に、それに対応する日本という国のあり方も問い直されています。今年の夏の庵野秀明さんの『シン・ゴジラ』は、まさにその写し絵であったと思う。自然の圧倒的な力に対抗するためには、人は社会を構築せざるをえないし、ときに宗教的なるものを必要としてしまうということを、いま日本人が、気づき直していると思います。

### 日本の禅美術から ZENアートへ

村上 山田さん、僕から質問があります。禅と道教に関してです。丁度昨日、岐阜県多治見の陶芸家、安藤雅信さんとお会いしました。彼曰く、前は日本の茶のお点前の脱構築をして楽しんでいただけども、今はもっと自由な中国茶をやって、そのほうが気が晴れる、とのことなのです。茶の湯は禅が



**Bijutsu Techo**  
**November 2016**  
**Yamada Shoji**

起源であるように、中国茶は道教が起源とのことでした。僕にとつて禅は、画を描く際の作法として、「無になって自由になる」というイメージがあつたので、彼のように「禅だから不自由である」と言う人がいることを新鮮に感じました。道教、老荘思想というものと禅の自由の概念の差はなんだろう、というのが質問です。

——道教の場合、「神仙思想」という仙人の思想が関係しています。自身の健康をいかに高めるかという、現世利便的な部分もありますし、肩の凝らない思想かなど。とりわけ莊子の教えはお茶目で、自由さがあると思います。対して禅やお茶の世界は、約束事も多い。禅自体は、厳格な部分と柔らかい部分が両方あり、それらをうまく共存させていますが、表のストイックな部分がお茶の作法や道具に活用されているんです。

**村上** 安藤さんは、老子を説明するものとして「大巧若拙」という漢

字を見せてくれました。

——「大巧は拙なるが若し」。鈴木大拙の居士号のもとになったものですね。「本当に巧みな者は自分をよく見せようとしないので、一見すると下手に見える」という意味です。禅の公案集『碧巖録』の最終則にも引用されています。

**村上** 安藤さんは「大巧若拙」を1980年代の「ヘタウマ文化」と結びつけていたんです。つまり、ヘタウマのような拙さに接近することが芸術にとっては大切で、禅的な求道心は、戦後日本ではそれほど大事ではなかったと。これは僕の禅の印象と真逆で、興味深かった。僕の中の禅は、西洋での受容の仕方と同じく、とてもカジュアルなものなんです。求道的ではなく、気軽に「無」に到達して、自由を獲得する。その意味では、ヨガの体操の受け止められ方に近いものです。僕はそのカジュアルな部分で、自分なりに受容して利用してきたので、もっと自由な思想の道教と



村上隆 慧可断臂 心、張り裂けんばかりに師を慕い、故に我が腕を献上致します  
 2015 アルミニウムフレームにキャンバスをマウント、アクリル絵具、プラチナ箔  
 100×100×5.08cm Courtesy of Galerie Perrotin

はなんだろう、と気になったのです。——つまり、「日本の禅美術」と「海外のZENアート」という区別で言えば、村上さんは西洋経由の「ZEN」のイメージを強く持っていたということですね。

**村上** まさにその通りです。達磨を描いたのも、ニューヨークのジャパン・ソサエティーで行われ

た「悟りの世界」展(2007年、P.53)や、ボストン美術館の達磨図など、海外で見たもののカジュアルさに受けた影響が大きいです。——ジャパン・ソサエティーの展示は、西洋風のZENではなくて、日本の禅美術をきちんと紹介しようという真面目な展示だったというのが、研究者の間の認識です。た



## 戦時国家アメリカには、 わざわざ異文化に 手をつけないと生きていけない という切実さがある

——いやいや、私は勘違いだからいけないとはまったく思わず、現地で受け取られたものがそこでのあるべき姿だと思えます。今回、サンフランシスコを取材したのですが、カフェのインテリアなどにZENが溶け込んでいる印象がありました。狭義の禅からはもちろん逸脱したのですが、それがZEN的で、クールなものとして広がっていると。村上さんの円

だ、たしかに多くの人のあいだでは、まだZENのイメージが強いように映ったと思います。

村上 僕としては、本当にカジュアルに受けているところ、認識が止まっています。そういう勘違いが、日本で叩かれるゆえんですね。すみません(笑)。

相図なども、そうした文脈に響くものがあったんだと思います。

村上 「誤読」は僕がもつとも好きなテーマでもあります。最低限の教養はないと、ですよ。反省です。最初の話に戻りますが、日本人がなかなか理解できないこと、かしらなければならぬことは、アメリカは戦争をし続けている国であり、宗教大国でもあるということだと思えます。戦争で受けた心の病も社会に広がっていますし、いまだに宣誓するときは、聖書に手を置かなければいけない。そうした国の人々が、わざわざ異文化に手をつけないと生きていけないという切実さにおいて、僕はZENアートを非常にポジティブに感じるので。

——そして、禅美術そのものも、もともとは戦いの時代に生まれたと。

村上 戦争と茶の湯。城塞の建築や美術は、その現場に生きた人間の死生観、光と影のコントラストが極まったところ燦然と輝き生まれ

た芸術であると思うんです。禅ではなくて洋物のZENアートの歴史的な真偽を問う議論はあるとは思いますが、アメリカには禅もしくはZENの思想、美を欲する情景がある。そして震災以降の日本には、無を欲する素地があると思います。

### インタビューを終えて

《五百羅漢図》や「円相」によって、村上隆は国内での評価をぐっと上げたと感じている。ポップ・カルチャーから3・11を経て自己の内面に回帰し、仏教へと飛躍したとのわかりやすい物語で、わたしは村上さんを理解していた。

しかし、村上さんの内省は、癒やしや祈りに留まっていなかった。「戦いの時代の美術」としての自身の「ZENアート」を、アメリカという絶え間なく戦争をする国にみせていたのだ。それは作品の文脈

を置き換えることに活路を見出してきた、彼の戦略にのっとったものでもあった。

「ZENアート」は村上隆というフィルターを通して、ふたたびアメリカ、そして西欧に向かって提示された。同時に彼の「ZENアート」は、日本の文脈でも新しい「禅美術」として受容される可能性を秘めていると思う。禅/ZENは村上隆を触媒にして、さらに変化しつづける予感がする。(山田奨治)

### Profile

むらかみ たかし 1962年東京生まれ。93年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。2000年に「スーパーフラット」の概念を提唱。01年有限会社カイキキを設立。近年の個展に15年「村上隆の五百羅漢図展」(森美術館、東京)、同年自身のコレクション展「村上隆のスーパーフラット・コレクション」(横浜美術館)を開催。16年に第66回芸術選奨文部科学大臣賞美術部門受賞。

やまだ しょうし 1963年大阪生まれ。国際日本文化研究センター教授。筑波大学大学院修士課程医学研究科修了。京都大学博士。専門は情報学・文化交渉学。主な著書に「禅という名の日本丸」(弘文堂、2005年)、「日本の著作権はなぜもつと厳しくなるのか」(人文書院、2016年)など。「東京フキウギと鈴木大拙」(人文書院、2015年)で第31回セブ・ロケンドルフ賞受賞。